いしづち

2024.11
NOVEMBER
No.161

公益社団法人 愛媛県建築士会
Ehime Society of Architects & Building Engineers
http://www.ehime-shikai.com

Vers une Architecture

自分磨きへの道しるべ　建築パース制作基礎編1

世界建築紀行 ダ・ヴィンチが見たミラノとヴェネチア（後編）

ISHIZUCHI
Ehimeken kenchikushikai
2024 11
NOVEMBER No.161

CONTENTS

1 Vers une Architecture 道上壯／VuA……①
2 自分磨きへの道しるべ 建築パース制作基礎編1） 松山支部 尾﨑 光高……③
3 世界建築紀行 ダ・ヴィンチが見たミラノとヴェネチア（後編） 西予支部 松山 清……⑤
4 委員会報告 愛媛の登録有形文化財 第11回 愛媛県庁本館
文化財・まちづくり委員会 委員長 峰岡 秀和……⑨
5 支部報告（建築士の日の行事）
ぬりえワークショップ＆無料住宅相談会 四国中央支部 遠藤 彰騎……⑪
いまばり建築巡礼2024 今治支部 重松憲太郎……⑫
建築士とめぐる地元の名建築 大洲支部 支部長 仲尾 和彦……⑬
目指せ建築士 宇和島タワーを作ろう！ 宇和島支部 青年部長 稲葉 太一……⑭
6 けんちくの輪 かぎられた時間 八幡浜支部 矢野 美紀……⑮
7 お知らせ 令和6年度 第4回理事会概要報告 事務局……⑯

※尚、表紙及び本誌記事の無断転載を禁じます。

水彩、紙

題：「森林・久万高原町」
サイズ／F6

久万林業を発展させるきっかけとなったのは、和歌山県から本町の四国霊場44番札所「菅生山大宝寺」の住職として来住した井部栄範が、当時の山野の荒廃と民生の疲弊を深く憂い、自然条件がスギの育成に適していることに着目して、明治5年から、自ら植林を行うとともに、付近の住民に対しても苗木の無償配付を行うなど広く植林を呼びかけたことである。
また、久万林業の本格的な産地づくりは、昭和30年代後半から始まった。「品質の揃った良質材を生産する」という目標で郡単位で独自の育林技術体系を全国に先駆け昭和44年に作成し、林研グループ、行政、森林組合、林家が一体となった全町的な施策の展開を図った。
（参考資料・久万高原町のホームページより）

【告知】上田勇一絵画教室展が11月に開催されます。いしづち表紙画も展示予定。是非お越し下さい。
会期：2024年11月24～29日
場所：ギャラリーキャメルK（松山市錦町33-3）
時間：11時～17時（最終日16時）

表紙作者 上田 勇一 プロフィール

1974 東京生まれ
1980 小学校から高校まで松山在住
1990 東日本建築教育研究会製図コンクールにて奨励賞
1991 愛媛県内高校生建築競技設計にて会長賞（愛媛県建築士事務所協会主催）
1993 画家・高橋勉氏に師事。約10年間、古典絵画技法全般を学ぶ
1996 日本工業大学建築学科 卒業
1998 画家として活動開始する。東京や埼玉にて毎年個展開催
2002 日本ファンタジーノベル賞受賞作者「世界の果の庭」（新潮社）の装丁担当
2003 美術家の登竜門である昭和会にて優秀賞（東京／日動画廊）
2010 愛媛県美術館に作品「ドライフラワー」収蔵される
2015～17 愛媛新聞 冊子アクリート表紙画連載
絵画教室やオリジナルブランド額工房「㈱リチェルカ」を設立
2017 「えひめの塗り絵」を出版
その他、出版装丁画や受賞多数、全国にて個展中心に活動。
現在、現代日本美術会 会員／審査員

Vers une Architecture

道上壯／VuA

「Vers une Architecture」という言葉を知っていますか？フランス語で「建築をめざして」という意味です。ル・コルビュジェの1923年の著書の表題です。近代建築というビックバンのスイッチを押したのが、この著書だと僕は思っています。

「建築って何ですか？」と聞かれた時に、誰も明確に答えることができません。それほど建築は奥深くて謎めいています。数千年が経った今でも、世界中で数多くの設計者が建築を考え、いまだに新しい建築が生み出されています。答えのない問題、いや、無数に答えのある問題。円周率のπのような、終わりのない無理数。小数点以下は循環しない。常に新しい数字の羅列が無限に続く。コンピューターでの計算結果が100兆桁をこえても、まだまだ計算は続いています。建築もそれに似ています。

僕が建築の世界に足を踏み入れるようになったのは、大学２年生の後学期に専門課程の選択を迫られた時だ。土木でスケールの大きな構造物をつくるのも面白そうだし、建築で色々な建物をつくるのも面白そうだし、迷ったあげく、たくさんの人に見てもらえる建築がいいかなと、「第１希望＝建築」「第２希望＝土木」で出したところ、建築に決まったというわけだ。

専門課程が決まって、そのまま建築にのめり込んだわけではない。逆に、建築とは距離を置いた学生時代を送ることになる。建築好きの友達から「この建築知ってるか？日本建築学会賞を取った建築だ。」と教えてもらったものが、僕にはちっともいい建築とは思えなかった。

当時の僕はまったくの勉強不足で、他にもたくさん色々な建築があることに気が付いていなかった。そして、建築ってひょっとしたら、自分の感覚とは違った別世界のものなんじゃないかと思うようになってしまった。絵画や彫刻のような芸術的な特別の感覚が必要で、自分には理解しづらい世界なのではと。当時、バイクが好きだった僕は、学校に席を置きながら、バイトとバイクに明け暮れる日々を送ることになる。

「来年が学生最後の年になるなぁ。」そう思いながら年末に生協で買い物をしていたところ、ある一冊の本が僕の目に入ってきた。「僕は時計職人のように」そのタイトルに惹かれてパラパラとページをめくってみると、強烈にかっこいい建築のドローイングが描かれていた。「これだっ！」自分の興味が持てる建築に出会った嬉しさで、当時の貧乏学生の僕には高価なその本を、僕は迷わず購入した。この時から、僕は建築に興味を持って、建築について考えるようになった。「建築って何だろうか？」と。

ハンス・ホラインの言葉を知った時は衝撃的だった。「すべては建築である」この禅問答のような宣言は、建築に対する一つの答えのように思えた。そして、どんなものも建築たりうる寛容さに感激する

とともに、その曖昧な広さではなく核心を突いて欲しいという思いもあった。それでも、この言葉は、あらゆるものが建築としての可能性を持つという意味で、僕を魅了した。

自分でやり始めようと思った時、事務所の名称を決める必要があった。レム・コールハース率いるOMA（Office for Metropolitan Architecture）のような、頭文字を取ったものにしたいと思っていた。そして、COMME des GARCONS（コムデギャルソン=少年のように)のように意味を持つ言葉の略にしたいとも思っていた。そんな時に、ふと頭に浮かんだのが「建築をめざして」コルビュジェの著書だった。

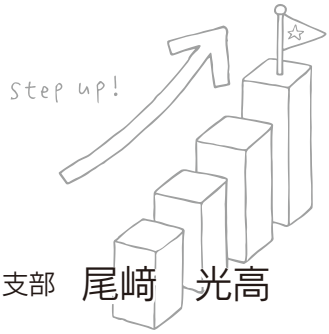
「Vers une Architecture」フランス語の正確な発音はよく分からない。そこで、頭文字だけ取って英語読みにしてみた。「VuA(ブイ・ユー・エー)」そして、初めて「建築をめざして」を読んでみた。内容はよく理解できなかったが、近代建築の源泉がここにあることだけは分かった。コルビュジェは、この著書で近代建築を示したのではなく、近代建築を考えなければならないことを明言したと思っている。

建築は、まだまだ道半ばだ。現代建築は、近代建築とどんな関係にあったのか？現代建築は、次世代建築とどんな関係になってゆくのか？現代建築が大きく切り変わるまで、誰にも分からず、これから築いてゆくことになる。小さな変化で、いつの間にか変わってしまうのか、ディープインパクトで、ある日突然に変わってしまうのか、できればその激変を目の当たりにしたいものだ。

高名な建築家も市井の設計者も、ただひたすら建築を考え続けるしかない。そんな永遠の命題に気がついたコルビュジェが、みんなの拠り所として考え出したのが、「Vers une Architecture」なのではないだろうか？近代にまつわる様々なことを書き連ねながらも、その先にある無限連鎖の難業への心構えとして後人に伝えたかったことが、「建築をめざして」という御旗だったのではないだろうか？

みなさんは建築をどう捉えていますか？崇高なもの、日々の生業、憧れ、煩い、人生、仕事、学業、趣味、興味の対象、無関心…、何だっていいと思います。だってすべては建築ですから。フランス語で「vers」は方向を示します。一人一人が自分の思った方向で進むこと。そして、その集合知が、いつしかある方向を示し、新たなる局面へ進んでゆくと思います。

次の時代の建築を、見てみたいと思っています。長生きしても叶わないものなのか？それとも直ぐに見られるものなのか？ひょっとしたら、もう目の当たりにしているのかもしれません。ひょっとしたら、数千年も先のことなのかもしれません。建築はいつまでも先に進んでゆきます。コルビュジェは、東方への旅の中で、建築という終わりのない旅に気がついた、最初の賢者だったと僕は思っています。



建築パース制作基礎編１）

１点透視図法（平行透視図法）

松山支部　尾﨑　光高

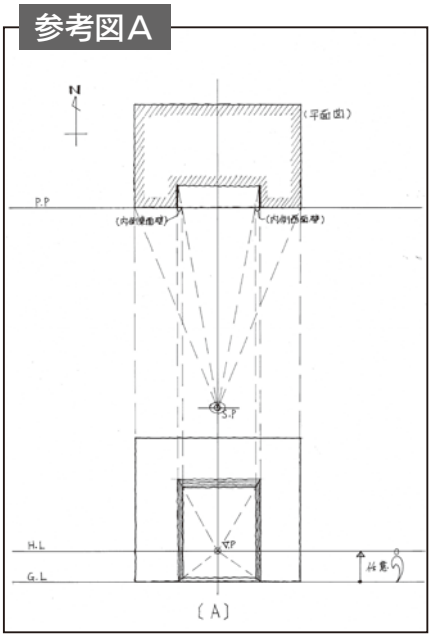
今回より各技法の紹介をしていきたいと思います。まずは、１点透視図法についてです。この技法は一番簡単で尚且つ時短で制作出来、打合せ時に役立ちます。先ず最初に共通用語の説明をします。

参考図内共通用語解説

ＰＰ　ピクチャーライン（画面）です。平面図が接しているので、この位置が実際の建築物の高さとなります。
ＳＰ　スタンディングポイント（人の立ち位置）です。カメラ、スマホで撮影する時の自分の立ち位置、あるいは建築物を見ている位置となります。
ＶＰ　バーニングポイント（焦点又は消失点）です。人が見ている位置と覚えて下さい。
ＨＬ　ホリゾンタルライン（目の高さ）です。このＶＰとＨＬは1点透視図の場合、同じ位置となります。１か所しかないので１点透視図と呼ばれています。これらは各技法とも同じです。

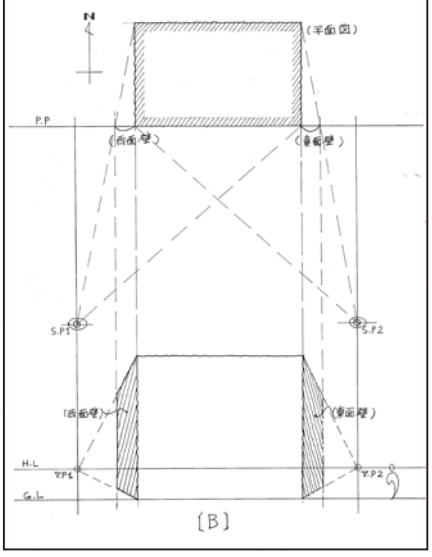
基本原理を理解する為に、まず実際に描いてみましょう。
参考図Ａから解説していきます。
上に平面図をＰＰに接して描きます、その下に立面図を描いてＧＬを入れます。次にＳＰ位置を建物の中心に取り、任意の距離で配置します。自分の立ち位置を決めるわけです。(尚、平面図は立体感を増す為に内側にセットバックした形としました。)立ち位置から建物を見るわけですから建物の各部分とＳＰとを補助線にて結びます。それから、立面図にＨＬを設定し（この図は1.6Mとしています）ＳＰ線とＨＬ線の交点をＶＰとします。次に、平面図に戻りセットバック部分とＳＰとの補助線とＰＰの交点を立面図に下していきます。立面図についてはセットバック部分とＶＰとを補助線で結び、平面図からの補助線との交点が奥行となり、各点を結べは立体図の完成です。必ずＳＰ、ＶＰに目線が集まることを理解してください。これが基本で、建物の形が複雑でも同じ作業の繰り返しをすることによりパースが作成されていきます。

参考図Ａ



次に参考図Ｂの解説です。
Ａと違う所は、ＳＰを左側にした場合と右側にした場合の例です。それぞれ西面壁と東面壁が見える位置に立つと立体的になりますね。まず、ＳＰ１と西面壁の奥側角を補助線で結び、ＰＰとの交点を出します。そこから立面図に補助線を下します。Ａと同じようにＳＰ１線とＨＬの交点となるＶＰ１を設定します。それから、立面図角とＶＰ１を補助線で結んで交点を出して各点を結んで完成です。ＳＰ２も全く同じ作業となります。
どちらの側面を描くかはデザイン的にカッコイイ側を選ぶと良いかと思います。又、側面をどれだけ見せるかはＳＰ位置の調整によります。より効果的な位置取りが大事で、下図の段階で８割方パースの出来栄えが決まります。絵画制作、写真撮影の折のアングル決めが重要なのと一緒ですね。訴求力にかなり影響してきます。

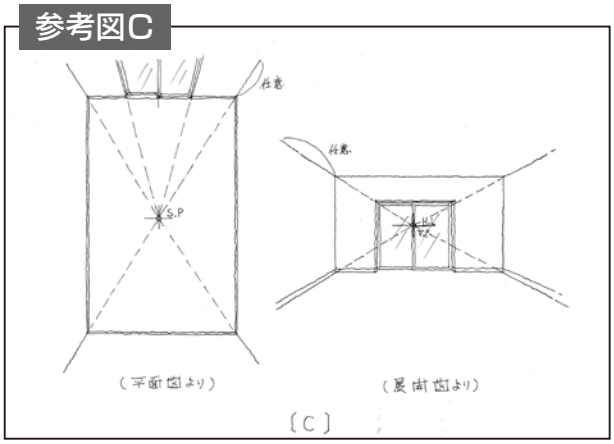
参考図Ｂ



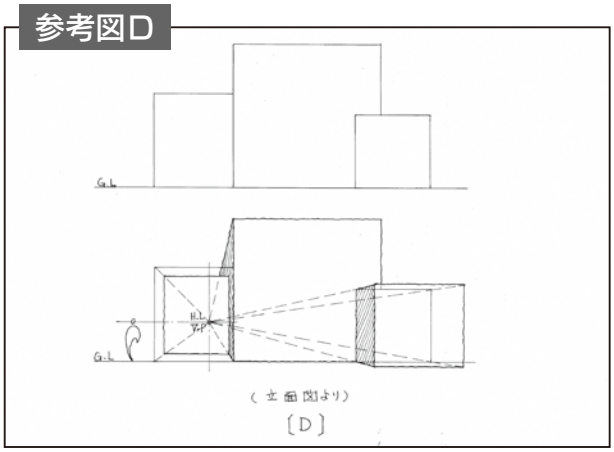
これは設計事務所勤務時代に、内子座の現地調査及び復元工事図面の作成に参加させて頂いた時に描いたパースです。（旧入場券より抜粋）正面はシンメトリーな外観であった為、１点透視図で描くのが建物の表現として良いだろうとの判断でした。ＳＰを少しだけ右側寄りにして、太鼓櫓が見えるようにＨＬはおおよそ2.5mから３mで設定しました。不透明水彩で色付けしましたが、年月を経た古めかしい感じで仕上げております。このように建物の特徴を見極めて制作していきます。

▲１点透視図参考例（内子座）

参考図C



参考図D



▲１点透視参考例（大阪某ビル内）内装の参考として撮影しました。床の赤いラインが印象的でした。

▲１点透視参考例（香川県庁）研修で来庁して内外を視察しました。

参考図Cは左側が平面図から１点透視図とした例ですが、この場合は鳥瞰図的な表現となります。ＳＰ位置を任意で設定して、四隅と補助線で結ぶと壁の立ち上がりを表すことが出来ます。さらに掃き出し窓も追加するとこれでパースとなります。又、家具、カーテンなどを足していくとインテリアパースにもなりますね。良くマンションの間取り図とかで描いていました。この原理を理解しておけばフリーハンドで施主の前で描くことが簡単に出来るようになります。

そしてもう一つは展開図から描き起こす方法です。ＶＰとＨＬを設定して四隅との補助線を結び延長すれば壁の表現となります。こちらも平面と同じで家具、照明、木質フローリングの線等描き足していけばインテリアパースが仕上がります。このように簡単に手描きパースが制作出来ますので打合せ時に役立ちますね。自分がアピールしたいデザイン部分等の訴求に、説明に生かせると思います。経験上、施主に視覚的に訴えるのが一番理解して貰えました。尚、家具等の描き入れ方は実践テクニック編でご紹介いたします。

参考図Ｄは立面図から描き起こした例です。上が立面図です、左側が引っ込んでいて右側が出っ張っている設定で作成していくとします。先ず左側にＶＰとＨＬを設定して建物の角とＶＰを補助線で結び、出込み引っ込み距離は任意で位置を決めてみました。施主への説明用は自分で図面を作成していれば、ある程度スケール感が頭に入っているので比率で作成出来るかと思います。参考図Ａ，Ｂを基に練習してみて下さい。慣れてくると比率的な感覚で手描きパースが描けれるようになります。建物のデザインを考える場合に比率とかバランスとかを考えながら進めていく場合があるかと思いますが、そういう訓練を積み重ねることも大事かと思います。設計する上で使い勝手も大事ですしデザインも大事になってきますね。建てたいと思わせるテクニックを身に着けることも必要ですね。手描きパースを身に着けることは色んなメリットが出てくると考えております。私はパ―スを描いてきたおかげで、間取りを考えている時に、頭の中で立体映像が見えています。設計業務にも大いに役立ちます。皆さん頑張ってみて下さい。

１点透視参考例（香川県庁）研修で来庁して内外を視察しました。

色んな建物を見学することも、又、大事な自己研鑽となります。今一度、建物を色んな角度から見て下さい。パースはその見たままを再現する為の表現方法です。かの有名なレオナルドダヴィンチの最後の晩餐も１点透視図法が用いられています。身近に様々な実例があり、それらを勉強することも早く理解出来る要素かもしれません。

次回は２点透視図法についてご紹介したいと思います。建築士会ＨＰよりカラー版が閲覧できますので是非ご覧下さい宜しくお願い致します。

世界建築紀行 vol.28

ダ・ヴィンチが見たミラノとヴェネチア（後編）

西予支部 松山　清

1 サンマルコ広場とは

▲サンマルコ広場と鐘楼

ヴェネチアの“世界で最も美しい広場”は、たまに海水面が上昇して水浸しになることは知っていたが、実はサンマルコ寺院が正面に建ち、新約聖書４人の福音書家の一人・聖マルコが祀られているキリスト教の聖地なのだ。建築士会函館大会の際に訪れたトラピスチヌ修道院では、新しくなった通用門壁面レリーフが受胎告知・イエスの降誕・聖家族のエジプト逃避であったが、エジプト逃避のことがわからなかったので、聖書を完読。その成果でサグラダファミリアの生誕・受難のファサードやミラノのドゥオーモの扉の彫刻、宗教名画が聖書のどのシーンを描いているのかなどの理解が格段に深まったのだ。“マルコによる福音書”は最重要な聖典であり、ヴェネチア商人がエジプトのアレキサンドリアからマルコの遺体を持ち帰りここに祀ったという史実を知り、私にとってこの広場がただの観光地とは違った、歴史を感じる格別なスポットとなっていた。

2 ヴェネチア散策

2.1 ミラノから列車でヴェネチアへ

2024年2月1日朝、ミラノ駅前のホテル・ヴェストロを出発。ヴェネチア行きの列車は前日下見をしていたので少しは安心だったが、朝は時間の過ぎるのが何かと早い。荷物の整理に時間がかかったが、大きなスーツケースはホテルに置いておいて、ヴェネチアへは小さなキャリーケースだけを持って行くことにした。「Please keep my suite case until tomorrow evening！」と言うと、フロントマンは気持ちよく

▲ヴェネチア行き特急列車

▲駅前広場と運河

▲サンマルコ寺院

「Off cource. No problem!」と言いながらスーツケースを預かってくれた。ミラノ中央駅に行くとすでに列車は入線していて、イタリアデザインの芋虫のような赤い顔の車体が停車していた。ミラノが始発なので乗り込む時間はあったが、指定席が車内入口でなんか落ち着かない。人の出入りが激しいためゆっくりとうたた寝もできなかった。列車の窓が全般的に濁り水をぶっかけたように汚れていて、外の景色がはっきりと見えない。行きも帰りも同様であった。これくらい何とかなりそうなものなのだが、イタリア人のこの神経にあきれたくらいだ。そのため印象に残るような北イタリアの景色もあまり見ることが出来ず、定刻の10：42にヴェネチア・サンタルチア駅に到着した。

終点なのでノンビリと列車から降りたのだが、駅舎を抜け正面の広場へ出るとすぐ前の運河が目に飛び込んで来た。ワクワクするような気分。ここへ来た人みんな同じように感じているのが伝わってくる。ビジネス客は見当たらず、世界中からやって来た観光客ばかりだ。運河には水上バスやゴンドラが行き交い、対岸は教会を初めとする中世の時代に遡ったような景色だ。“ついにここまでやって来た、”という喜びと予想を超える程の感動でもあった。写真やTVで見てその雰囲気は知ってはいたが、それを十分に超える程の”未知との遭遇”という気分。この街がどれ程の魅力を見せてくれるかが楽しみになってきた。来る列車の中で、帰

▲寺院から見たサンマルコ広場

▲寺院内部

りの列車の予約と、３日にはクレモナ日帰りにチャレンジすることにしたので、その切符をネット手配した。すぐに発券されてメールでQRコードが送られてきた。これが世界標準なのだが、日本も早くそうなって欲しい。

２.２ サンマルコ寺院

ヴェネチアのホテルはサンタルチア駅前近くのNHホテルを予約していて、すぐ見つけることが出来た。駅前には仮面舞踏会で貴族が着けていた仮面やマスクがたくさん売られていて賑やかで、その中に水上バス・ヴァポレットの切符売り場も並んでいる。午前11時前たったので荷物を預かって欲しいとお願いすると、すでに部屋の準備ができており使用してもかまわないと言うのでアーリーチェックイン。一息ついて島内の観光へ出かけることが出来る。気持ちも楽になるし、助かった。ホテルのスタッフはみんな親切！

▲名物の仮面

▲運河の街並みにて

ヴァポレットの２日券を€35で購入。地球の歩き方には€20と書いてあったが随分と値上がりしたものだ。何処へ行くか決めてなかったので、まずはサンマルコ広場へ向かう。ヴァポレットに乗船して運河を通って行く。歩いて行くことも出来るが、まずは運河沿いの街並みも見物したい。ヴァポレットの各停船所への止まっている時間は数十秒から2分くらいととても短い。降りる準備をして着いたらすぐに下船しなければならない。この日のヴェネチアは曇りですっきりとしておらず、見通しも悪かった。遠くの島にある教会もやや霞んでいる。おまけにサンマルコ広場の鐘楼が工事中。上るのは諦めて広場をグルリと回り、スパゲッティレストランを見つけてカルボナーラを食べた。ビールとデザートを頼み€40、7千円程の昼食となった。

昼食後予約していたサンマルコ寺院へ向かう。ロマネスク・ビザンチン様式の傑作で、いくつものドーム屋根とクーポラが並ぶ様はイスラム建築のようでもある。内部は２階建てで宝物博物館があり、寺院正面を飾る4頭の騎馬像のオリジナルなどが展示されていた。その後サンマルコ小広場前からヴァポレットで沖合500m程に浮かぶサン・ジョルジョ・マジョーレ島へ渡った。誰も船を下りず、島はヴェネチア本島と違って静かな佇まいで、サン・ジョルジョ・マジョーレ教会の塔へ上って海の向こうに広がるヴェネチアの街並みとサンマルコ広場周辺の景色を眺めた。アドリア海北部のラグーナに点在する島々とそこを忙しく行き交うヴォポレットも見られたが、ヴェネチアの島々には山がなくて一面に建築物が所狭しと隅々まで建っていた。潟の堆積物の上に街ができたのだ。その後はアカデミア橋までヴォポレットで渡り、本島内を歩き回りながら駅近くのホテルまで帰った。

▲サン・ジョルジョ・マジョレー教会

▲サンタマリア・デッラ・サルーテ教会

２.３ ドゥカーレ宮殿

▲ドゥカーレ宮殿

２月２日は北東にあるムラーノ島へ行くため、水上バスの基地となっているリド島へ行こうと船にのったが、その前にサンマルコ広場へ立ち寄って、ヴェネチア共和国の富と権力の象徴、“ドゥカーレ宮殿”を見学しておきたかった。ネットで入場券を買うのだが５千円程もして、ちょっと高すぎないか。物価高もいい加減にして欲しい。貴族や宮廷が素晴らしく庶民の世界とは違うため、遠い世界のようで身近に感じられない。しかし、数百年前には仮面をつけて舞踏会が開かれていたのだろう。天井画や壁画は確かによく描かれていて、他では見ることが出来ないものだった。そのようなゴージャスな大広間が続く一方、別棟には牢屋棟があって１階から５階まで暗い石造りの牢屋が並んでいた。順路表示が悪くて、ここをグルグル２周以上回ったので、宮殿といえども牢屋ばかりか、とうんざりしたのだが、きっと君主や主人は自分に都合が悪い人々をここに幽閉していたのだろう。いつの時代もそんなことはある。

▲大評議の間

▲サンマルコ小広場の船着場

２.４ ムラーノ島

ドゥカーレ宮殿は見所も多かったが、気持ちは早く次のムラーノ島に行きたかった。サンマルコ広場から直接ムラーノ島へ行くことが出来ないので、東にあるリド島へ渡って、乗り継いで乗り継いでムラーノ島へ渡る。何回も乗り換えが必要だったが、船に乗るのも海からベネチア島の配置や様子を見れるというメリットもあり楽しい！

複雑な航路の組み合わせで島巡りをするため、地図をみるセンスと理解力が必要となるが、それを考えるのもまた楽しく苦にならなかった。

ヴェネチアには沢山の島があり、それぞれ独特の顔がある。ベネチア国際映画祭はリド島で開催されるのだが、そこへ立ち寄ったときは、リゾートの雰囲気を感じはしたものの華やかさや世界中からセレブが集まるようなものは一見感じられなかった。12kmの長さがあり、大勢の人が住んでいるのは間違いない。ゴンドリーナが言うには、ヴェネチアの島々の人口は５万人らしい。

▲ムラーノ島メイン通り

▲ステファノ広場と運河

ムラーノ島には本島並みに観光客がやってきていて、ベネチアングラスのガラス工房も多く、そこで土産物を買う観光客で賑わっていた。天気も良く太陽が燦々と降り注ぎ、明るい感じの島だ。教会が２つあるので、そちらを訪ねるのとガラス工房で土産を買うのが目的。教会近くのドーモで船を降りると、なかなか美しい街並みで、お土産屋さんやカフェが並び大勢がたむろする中心地だった。そばにカラス工房もあったので、入ってみた。小さな置物でも€40～50はするのが主流。５千円くらいと思いきや円安のため１万円弱くらいになると思うと何も買えない。とは言え記念品程度のものを購入。帰りは直行便で一気にサンタルチア駅まで帰ると、わりとあっという間に着き、かつ運河の景色も楽しめた。

ムラーノ島にはこれぞというレストランを見つけられなくて本島まで帰り、ちょっと遠慮して運河沿いを歩く。運河沿いの道はとても狭くて、人がすれ違える

▲ゴンドラから見た運河

▲ヴェネチア・サンタルチア駅

程度しかなかったが、そこでレストランのご主人に声を掛けられて、スパゲッティボロネーゼとホタテ料理を食べた。ビールを１杯とで€40程、７千円の昼食となった。

帰りの列車まで時間があったし、もう来る機会はないかもしれないので、ゴンドラに乗ってみようと思った。€90が料金で、交渉次第で安くなるとも聞いていたので、最後には駅までゴンドラで送ってくれとリクエストしたら、さらに€30追加となり€120。これって、２万円程、高すぎる！ゆっくり４人は乗れるのに一人で貸切なためコスパは最悪だ。

しかし、ゴンドリーナは資格が必要で実際なかなか上手くゴンドラを操っていた。絵はがきのような水の都の狭い迷路を、微妙なコントロールで接触を避ける。なかなかの腕前である。さらにスタイルも良くてみんなスラッと細くかっこいい。やっぱり名物なので太めの人はＮＧなのか。ヴェネチア・サンタルチア駅前でゴンドラを下りるとその後30分程時間があったので、教会の石段に腰掛けて大運河を行き交う水上バスやゴンドラなどを眺めていた。何もしなくて、ただぼーっと眺めているだけでも価値のある光景だ。そこには歴史と暮らし、希望や憧れがあった。

3 クレモナとマインツ散策

ミラノへは夕方到着し、翌３日朝に南に位置するクレモナへ向かった。フランクフルト行き飛行機の時刻が夕方だったので、ストラディバリがバイオリンを完成させた町を訪ねてみたかった。今日の列車は車体に落書きがたくさんされていて印象が悪い。イタリア人気質なのか、と諦める。

▲クレモナのドゥオーモ

▲クレモナの街

▲バイオリン腕自慢

クレモナには定刻の9：28amに到着、結構大勢の人が降りる。駅前広場は整然としており、お店などないが街は思っていたよりも大きく、建物も歴史を感じさせるものが多い。タクシーでローマ広場まで行こうと思っていたが、街並みを楽しむために歩くことにした。また、宮殿もあるので遠回りをして寄ってみた。全く知らない街ではあったが、重厚感のある建物も並びちょっと日本の地方都市とは違う。街中の道は碁盤の目とはいかず、自然発生的に道が斜めに走っていたりする。ストラディバリはローマ広場に墓があったそうなので、一先ずそこを目指した。公園も静かで、一回りしてみた。少し肌寒い。その後ドゥオーモへ入って中を探索。棺が置かれていたり祭壇があったりするので、ここには多くの人が眠っているのだ。キリスト教徒は過去の大司教などを神としてお祈りをしているように思える。

隣にクレモナを代表する高さ111mの塔トラッツォがあり、これは是非とも上りたくて入り口を探した。入場料€12だったので当然ＥＶで上るつもりだったが、乗り場が見つからない。「エレベーターは右だ」というのでその通り進んだが、塔の3階からも階段が続いていた。これを上って良いものだろうか、と思いながらどんどん一辺10m程の四角形の平面を回りながら上っていく。ＥＶに乗り損ねたか、とも思ったが、真ん中にはＥＶシャフト程度の空間はあるはずだが、と疑問に思いながら上った。15分程登り続けて、シャフト内に当たる部分が展示スペースになっていた。ＥＶシャフトはなかったのだ。時計の機械が置かれていて、もう上っていくしかない。四角形の平面をグルグル回りながら登る。途中、展望室もあってクレモナの街が一望できた。もうここまでいいかも、とも思った。しかし、階段は四角く折り返しながらまだまだ続く。いよいよ最上階というところに金網の扉があって、そこを出るとさらに階段が上へと伸び、最後は簡素な鉄骨回り階段がさらに続く。何処まで登るんだ、とリュックを置きカメラだけ持ち諦め気分で登った。3000m級の山へ登る気分だった。細い小さならせん階段で20m程登ると鐘のある最上部に飛び出した。風は弱いが冷たい。燦々と冬の日光が差し込んでくる。しばらく四周の写真を熱心に撮影。全く見知らぬ街なのだが、ストラディバリがバイオリンを完成させた町を見てみたい、という思いだけだ。

バイオリン製作は盛んであることの証かもしれないが、至る所街角でバイオリンを演奏している腕自慢がいた。時折教会の鐘もあちこちから響き、中世の良き街で活気ある風土だった。ストラディバリの足跡を辿るためにバイオリン博物館も訪れた。博物館には何基かの至宝ストラディバリウスが展示されていた。世界に誇る名器を見たことに感謝。時間不足でクレモナでの昼食を諦めミラノへ帰り、ホテルに預けた手荷物を受け取って、エアポートバスのブルマンでリナーテ空港へ向かった。

▲バイオリン博物館

▲ストラディバリウス

2月4日、フランクフルトから帰国する便までの時間、近郊のマインツを散策。大聖堂とシャガールによる青の世界の教会を訪れた。ネット検索しながら決めたが、不覚なことにガイドブックとドイツのwifiを申し込んでなかったので苦労した。午前8時半にマインツに到着、駅前も閑散としどっちへ行って良いかわからない。駅から大聖堂が見えるのかと思って来たが、中層建築が立ち並び、予想より街並みもきれいで発展していた。広い並木道が続き歩いていても気持ちいい。結局、途切れ途切れのナビで大聖堂にたどり着いた。3つ並ぶ左の扉から大聖堂に入った。日曜日なのでミサがあり、数人の人が席に座って祈っていた。正面サイドの壁にはパイプオルガン、中庭に出ると50m角程の見事な連続アーチ回廊の中庭が美しく手入れされていた。

▲マインツ大聖堂

▲ザンクト・シュテファン教会

その後、シャガールがステンドグラスを手がけたことで有名なザンクト・シュテファン教会を訪ねた。世界に類を見ない青の世界で、聖堂内部が青を基調とするシャガールの聖書の世界に満たされていた。これは第二次世界大戦で破壊され、再建されたものだが評価は高い。

4 イタリアの旅を終えて

今回はミラノ・ヴェネチア・クレモナ・マインツの街に足を運び、それぞれの建築と歴史を学ぶことができた。そして、その町が発展した時代を象徴するものが建築であると言うことを確信した。“建築に歴史は宿る”、と私は思ったのだった。

愛媛の登録有形文化財
第11回 愛媛県庁本館

文化財・まちづくり委員会　委員長　峰岡　秀和

はじめに

愛媛県庁本館は2021年2月26日に国の登録有形文化財となった。県では150番目の登録となる。庁舎建築は国で見れば重要文化財のものもあるが敷居が高いため、登録制度の特徴を生かす、最たる建築といえる。

▲愛媛県庁本館

▲入口左の柱には登録有形文化財を示すプレート

愛媛県庁本館は明治の廃藩置県により、県の中枢を担うための県庁としての役割が大きくなるにつれ、何回も建て替えられ、増改築がなされてきた。現在の庁舎は4代目に当たり、改築の動きは大正15年にスタートする。議会の会期を1日残した12月15日に意見書が提出されたが、財源措置を盛り込むなど根回しもしっかりとしており、異議なく確定議となり、とんとん拍子にことは進んだ。当時新庁舎を建てることを念頭に、議事堂は仮で別棟とすることにしたため、現在までその状況が続いている。

さて、愛媛県庁本館の建て替えは大正から昭和にかけて、愛媛県の威信をかけた大イベントであった。当初の予算（604,977円）よりも大幅に膨れ上がり、様々な方面から予算を確保し、総事業費は最終的に1,024,095円となった。入札は辞退者などがあり不調に終わったが、最終的に安藤組が落札した。設計主任は木子七郎、設計顧問（構造）は内藤多仲であった。ちなみに大正14年の金の円／グラムが1円37銭であったのに対し、2023年は平均で8,834円であった。それをもとに現在の価格に換算すると66億円というすさまじい金額であった事がわかる。

竣工後も世界恐慌や太平洋戦争など、昭和期の激動の時代を乗り越え、愛媛県のシンボルとして、また愛媛県民のために現役で頑張っている庁舎である。

外観・内観

建物は鉄筋コンクリート造4階建、建築面積は2,104㎡で、中央最上階にあるドームが特徴的である。両翼の建物は中央部より前後に飛び出しており、上部から見るとHの形に見える。シンメトリーな外観も相まって、重厚で落ち着いた建物になっている。外部は昭和19年に「県庁舎防空設備工事」（外壁を迷彩塗装）、昭和24年に「県庁舎外部塗装工事」（迷彩塗装を落とし元の色へ）、昭和37年に「県庁舎外装補修工事」（外壁の塗装が行われる）、昭和52年「県庁本館窓建具取替」（スチールからアルミサッシへ）、平成4・5年「外壁改修工事」（外壁のひび割れ・はく離の補修、清掃、元の洗い出しに戻す）といった工事が行われ、外観を保っている。

花崗岩の階段を上り、ホールから内部に入ると白と黒の市松模様で敷かれた大理石の床が目に飛び込む。落ち着きのある床だけに、周囲の白い壁や装飾を際立たせている。この大理石の床には隠れアンモナイトがあり、数えてみるのも面白いかもしれない。

▲玄関ホール　梁型が続き、その後ろの空間が明るく開けているため奥行きを広く感じさせる。（※）

▲市松模様の床。左には公衆電話、中央右にはエレベーターが見える(※)

玄関からホールに上がったところは2階となる。3階は重要な「知事室」「知事会議室」「貴賓室」などの部屋がある。貴賓室はテレビで見ることはなく、よくメディアに出ているのは知事会議室である。

▲貴賓室内観（※）

実は貴賓室の暖炉の上の天板にも、何もないと思っていたらアンモナイトがあるのである。

4階は式典などをおこなう「正庁」がある。装飾も多く、格式高い部屋となっている。この正庁の柱には面の形がおかしい柱が一本ある。面が柱途中で止まってしまっているのだ。ミス？とはこの部屋では考えにくく、どのような意味があるのか大変興味深い。

県庁本館は4階建てであるが、もう1階存在する。それはドーム部分の会議室である。ドームへは正庁の廊下を挟んで裏側にある階段から登っていく。この階段はらせん状になっており、半円部分が壁面から飛び出しており、3階の階段から見えるようになっている。この部分が県庁の中でも大好きなところであり、みなさんにもぜひ見ていただきたく思う。ドームの会議室には現在ジプトーンで天井が張られているが、古い天井がその上に存在していることが確認できている。本来の姿を見られる日が来るのだろうか。

▲正庁内観（※）

▲螺旋階段の外部。とても美しく、時間を忘れ見入ってしまう空間

▲ドーム部分にある会議室。周囲の壁には昔の県庁の写真などが並ぶ

最後に

歴史の絶妙なタイミングによって建てられた愛媛県庁本館。愛媛における昭和初期の建築であり、木子七郎の建築を堪能できる数少ない建築である。いつでも見られるのは正面玄関と2階の一部だが、申し込めば内部の見学は可能である。ぜひ一度見学（探検）してみてはいかがだろうか。

（※）印の写真は花岡直樹氏が撮影したものをお借りしたものです。

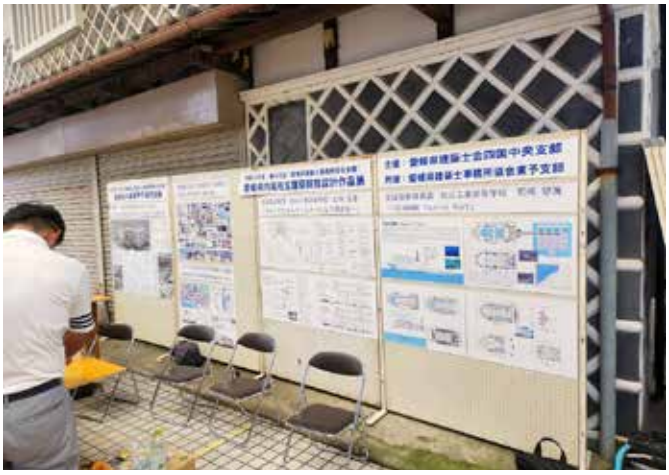
建築士の日の行事
ぬりえワークショップ&無料住宅相談会

四国中央支部　遠藤　彰騎

開 催 日：令和6年7月27日(土)
開催場所：四国中央市川之江商店街アーケード内
スタッフ：四国中央支部会員　8名

四国中央支部では、四国中央市の夏のイベントである四国中央紙まつりにて、ブースを出展しました。今回は昨年に引き続いて、ぬりえワークショップと無料住宅相談会を行いました。また、今回から新しく積み木のワークショップを行いました。

今年は昨年までにない新しい試みとして、愛媛県建築士事務所協会東予支部の共催により『愛媛県内高校生建築競技設計作品展』を行いました。また、『高校生の建築甲子園作品展』を合わせて行いました。



▲高校生の作品掲示の様子

ぬりえワークショップには、昨年同様多くの子供たちが立ち寄って思い思いに、ぬりえを楽しんでくれました。

▲多くの子供たちがぬりえを楽しんでくれました

積み木ワークショップには、最初なかなか人が集まりませんでしたが、岸支部長をはじめ、スタッフたちが積み木を組み始めると、興味を持って人が集まり始めました。結果的に、ぬりえよりも多くの子供が集まってくれました。

▲積み木を楽しむ子供とスタッフたち

無料住宅相談会には、RC造住宅の断熱についての相談が寄せられ、断熱の工法について説明しました。

▲無料住宅相談会で相談者に説明する岸支部長

今回の反省点として、積み木のスペースが狭かったため、来年はぬりえのスペースと積み木のスペースを入れ替えてみようと思います。

今年も参加してくださった方々とご協力いただいた皆様に感謝いたします。

▲参加スタッフ(一部)との記念撮影

建築士の日の行事 いまばり建築巡礼2024

今治支部　重松　憲太郎

開 催 日：令和6年7月27日(土)
開催場所：今治市庁舎・公会堂・市民会館・愛媛信用金庫今治支店
参 加 者：今治市内の小中学生１０名と保護者６名・スタッフ１９名

連日の猛暑が続く７月末、建築士の日のイベントとして昨年に引き続き「いまばり建築巡礼2024」を行いました。昨年は中学生を対象に募集を行いましたが、今年は5年生以上の小学生までに対象を広げてイベントの拡充を図りました。

▲参加者を前にあいさつを行う曽我部支部長

イベントの内容としては市内中心部に点在する丹下建築を巡るミニツアー。市民会館、公会堂、今治市庁舎（議場）、愛媛信用金庫今治支店の順で廻ります。

出発に先立ち、大野相談役によるセミナーが行われ、丹下健三、丹下建築についての説明、解説に参加者の方たちも興味深く聞き入っていました。

▲大野相談役によるセミナー

▲模型展示

また、会場内にはパネルや写真、図面、模型等の資料を展示しました。小中学生にとっては日頃あまり触れることのない物ばかりのため、楽しそうに眺めている姿が印象的でした。

公会堂ではステージや楽屋等の見学を行い、折板による特徴的な構造の解説が行われました。

▲ステージ上で記念撮影

今治市庁舎では議場の見学を行い、議会気分をみんなで味合わせていただきました。

▲議場にて１

▲議場にて２

最後に愛媛信用金庫今治支店の見学を行いました。

市庁舎からは少しだけですが徒歩での移動が必要のため、照りつける太陽の元を移動。暑い、あつい……。

信金さんでは会議室と屋上を見学させていただきました。こちらはめったに入れる所ではないので、猛暑の中、じっくりと堪能。屋上からはかなり広範囲に市内を見渡すことができ、建設当時はもっと見晴らしがよかったんだろうと少しノスタルジックな気分に浸らせていただくことができました。また、屋上のデザインが船をモチーフとしていることから、港を行きかう漁船や定期船などの汽笛が聞こえてくるような、こないような……。

▲信金屋上にて１

▲信金屋上にて２

快く見学を了承していただいた愛媛信用金庫今治支店様、今治市役所の方に支部一同感謝申し上げます。来年もよろしくお願いいたします。

建築士の日の行事
建築士とめぐる地元の名建築

大洲支部　支部長　仲尾　和彦

開 催 日：令和6年9月18日(水)
開催場所：大洲城・臥龍山荘
参 加 者：大洲高校生徒8名・先生1名・大洲支部6名

大洲支部の「建築士の日」の行事として、「建築士とめぐる地元の名建築」と題し、県立大洲高等学校の生徒8名を大洲城と臥龍山荘へ案内し、建築士としての視点から各施設の説明を行いました。

“実はよく知らないかもしれない”地元の名建築を建築士と共に建築的視点で見学してもらい、建築の魅力を知ってもらう事と、建築士としての仕事を知ってもらう事を目的として開催しました。

欲を言えば、将来建築士を目指す生徒が1名でも2名でも増える事を願って、理系・文系を選択する前の高校1年生を対象としました。

▲大洲城での集合写真

メインの説明は、大洲城天守閣の再建にも臥龍山荘の改修にも携わっておられる、菅野建設㈱の菅野隆次建築士に行って頂きました。

▲大洲城での説明の様子

▲臥龍山荘での集合写真

参加の大洲高校生徒は授業でも大洲城を研究されており、一般的な知識は身に付けておられました。“建築士的な説明”をどう行うかが一番の問題でしたが、菅野建築士により、実体験を踏まえた建築的な視点から説明を行って頂きました。

限られた時間でしたが、構造や材料、施工方法の話など具体的な話も多く、生徒も熱心に聞かれていました。私自身も初めて聞く内容も多く、スタッフ側の建築士も勉強になったと思います。個人的には“裏話”的な話もとても印象に残りました。

▲臥龍山荘での説明の様子

大洲支部としては初めての企画で失敗もありましたが、説明を行って頂いた菅野さんを始め、大洲支部スタッフの助けにより無事に行事を終える事ができました。

また、準備段階から大洲高校の先生には全面的にご協力頂き、参加生徒の募集や引率などを行って頂きました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

今回参加して頂いた生徒の中に、将来建築士を目指したいという生徒がおられたことが非常に嬉しく思いました。さらに今回の行事を機に、建築への興味が増した生徒さんもいらっしゃったようで、目的の一つを達成出来たと思います。

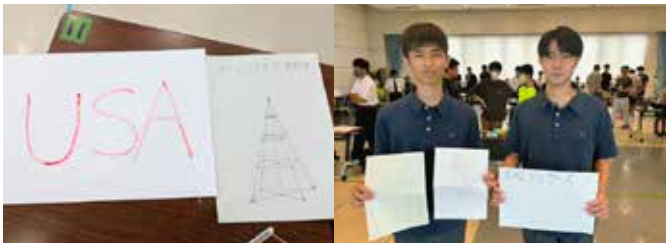
建築士の日の行事　目指せ建築士 宇和島タワーを作ろう！

宇和島支部　青年部長　稲葉　太一

開 催 日：令和6年8月18日(日)
開催場所：道の駅 きさいや広場 市民ギャラリー
参 加 者：中高生11チーム32名・スタッフ12名

私たちは建築士の日の事業として「目指せ建築士 宇和島タワーを作ろう！」を開催しました。去年までは割り箸を使って橋をつくるというイベントでしたが、今年はスパゲティを軸材、マシュマロを接合部として使い、タワーを作って高さやデザインを競うというイベントとしました。

事前に設計図（イメージ図）を考えてもらって、それを参考にしながら１時間の制作時間の中、豪華賞品目指して真剣に作っている様子が覗えました。



▲設計図の通りできるかな？

設計図に基づいて作成していく中で、補強したり崩れてしまったりと当初の予定が思い通り行かないチームもあれば、非常に精度良くきれいにタワーを組み上げていくチームもあったりと、チームの個性が表れていて、生徒たちはもちろん観客である保護者、スタッフ全員、非常に楽しい時間となっていたと思います。

高さ優先で徐々に曲がっていくもの、丈夫に考えていたけれど低くて後でどう高くしようかと試行錯誤するもの、タワーが隣の机に持たれ掛かってしまうもの、装飾的にも見える突起物で部材の変形を抑えるような技ありのもの、五重の塔やスカイツリーのような心柱をもつものなどと、様々で個性的なタワーが作られていきました。

詳細を見てみると、各自で勉強したのか経験から導き出したのか、四角形のフレームに斜めにブレースを入れた面材をモジュールに組み立てて行ったり、同じ長さの材料という特徴から、正三角形や正六角形といったハニカム構造といった合理的な構造が見られました。各者の建築の素養といったものが存分に感じられるものとなっていました。

▲崩れないよう慎重に…

審査は高さを測定しつつも、構造美やユーモア性などといった総合的な評価を行いました。そのためスタッフの嗜好も垣間見えつつ、順位や賞などに合わせた評価を行うことは非常に苦労しました。

▲レーザーレベルで正確に計測

この事業を通じて、参加した生徒さんや引率の先生、保護者の方にも私達の活動を知ってもらい、建築や構造計画の楽しさを感じてもらえたと思います。これをきっかけに建築従事者を目指してもらえたらいいなと願いつつ、次回に繋げていく活力にもなりました。最後に今回のイベントに準備等尽力してくれましたメンバーの方々、本当にありがとうございました。

かぎられた時間

八幡浜支部　矢野　美紀

西予支部、水野さんよりバトンを受け取りました、八幡浜支部の矢野と申します。

私の実家は、祖父の代から大工を営んでいましたが、兄の代で看板を下ろしました。幼少期から、実家の横には作事場があり、かんな屑やおが屑の中に基地を作って遊び、よく伯父から「あぶないけん、ここで遊ばれんよ」って叱られた思い出があります。今も、木の香りが大好きです。いつのころからか、手に職をつけたいという気持ちがあり高校卒業後、建築の専門学校に進み、その後、八幡浜の設計事務所に8年間勤め、その後に今の建設会社に入り、早や21年が経ちました。

当時は、図面を見ることはできても知識が伴わず、現場を知らないまま、現場管理の道を歩むことになり、色々と苦難の日々の始まりとなりました。現場と言えば、キツイ・汚い・危険……と思い浮かばれると思います。また、私は女という事もあり、当時は下請け業者さんとの関係性をうまく築けず、話すことすら怖いって思うことが多々あったように思います。心が折れそうになっても、工務の上司の方々のおかげで、私に居場所が出来始め、今となっては、感謝でしかありません。そのうちに、不安が自信に変わり始め、業者さんにも名前を覚えてもらえるようになりました。ここまでの自分になっていくのにも、かなりの時間を要しました。

▲現在進行中の八幡浜市の工事現場

営繕工事・改修工事・新築工事と工事の規模がそれぞれ違い、また、上司の監督の下につく現場も増えてきました。監督の下につくことで、現場管理とはどういうものかということが、実際に工事を進める上で学ぶことが増え、今でもまだまだ勉強不足な点が多々ありますが、悩んでも仕方ないという考えをもてるようになり、分からないことは、聞く・調べるなど確認する作業を続け、私が現場代理人となる現場をもつことが出来るようになりました。

▲趣味の写真（撮影：大洲フラワーパーク）

それから、私は、みかん農家に嫁いで24年が経ち、11・12月の2か月間は、現場も忙しいですが、家のみかん取りも佳境になるため、気合い・気持ちで、ここ数年踏ん張っている自分がいます。娘も独立し、社会人2年目となりました。家族がいつも私の仕事を理解してくれ、また、協力もしてくれて、本当に感謝しています。

私は現場員である前に、母であることを胸に…と思ってきました。娘が幼いころのことを思い出すと、さびしい思いをさせてしまったことを悔やむこともありますが、親の背中を見て育っているなって関心するところもあり、今は安堵しています。

いろいろな面で、かぎられた時間を大切にしていくことが、人として一番大事なことだということを、いつも感じます。

今回、けんちくの輪に参加させて頂けたことにも感謝し、これからの人生も、かぎられた時間の中で、私なりにやれることを精一杯取り組んでいきたいと思います。

あなたの原稿をお待ちしています。

公益社団法人として、異業種や全ての皆様から建築士会の枠を超えて原稿を広く募集して広く購買して頂くようにしています。是非、寄稿して頂きますようお願い致します。本年度は年6回発行となります。
（尚、営業的色彩の濃いものにつきましては、掲載されない場合もありますので、ご了承ください。）

「いしづち」の次号の原稿締切日
令和7年　1月号（162号）　令和6年11月21日（木）

※校正印刷の関係で締切延長の最終期限は一週間後の木曜日とします。
※１ページ写真込みで2150文字（25文字×43行×横2段）のWORD様式を事務局で用意していますのでご活用ください。
写真は１ページ当たり３枚程度まで題名を付けて添付してください。
また宜しければ投稿者の写真（免許写真程度の顔写真）を添付してください。
会員の皆様のご参加をお待ちしております。また記事等についてのご意見・ご感想もお寄せください。
（尚、投稿された原稿につきましては、要旨を変えない程度の若干の訂正等を加えることがあるかもしれませんので予めご了承ください。）
この誌面を通じて、会員の方々、そして一般の方々にまで、建築についての対話等の輪が広がればと願っています。
情報・広報委員会

読者の声欄

「いしづち」に関するご意見・ご提案などをお寄せください。お待ちしています。
「いしづち」編集委員会（士会事務局内）宛　FAX 089−948−0061

編集後記

奈良県吉野の吉水神社に訪れました。

吉水神社にある書院は、日本書院建築史の第一頁に位する初期書院造の代表的傑作と言われ、また、日本住宅建築史上最古とされており、ユネスコより「世界遺産」として登録されています。

この書院は、書院造の基本となる床、棚、付書院の特殊な構造は、とても古風な作りで、鎌倉時代初頭に生まれた初期書院造の歴史を知る上での重要な遺構となっていて、本格式の構造を備えた鎌倉期住宅建築の典型として数々の珍しい手法が各所にあり、現在の日本住宅最古の実例として、とても良い参考となる建物だと思いました。

書院（義経、静御前の潜居の間）の特徴として

- 床の間…間口の広く奥行の浅い特殊な構造は、類例のない最古の床といわれ、現在の床の間の元祖とされており、凄く格式の高さを感じられました。
- 違棚…上下の間を束で支えない方法で取り付けられ、今でも大きく歪みもなく技術の高さを感じました。
- 柱…全ての柱が面取柱になっており、四寸角に八分の面がありました。この面の広さによって年代の古さが分かるそうで、現在わかっている書院の柱では最も広い面取となっているとのことで、面取が強調され美しく優雅にさえ感じられました。
- 釘隠…六葉型の釘隠は通常は鉄や銅で作られていますが、この書院の釘隠は全て木で作られており、清楚で落ち着いた雰囲気を感じました。
- 天井板…茶室の天井に使われるヘギ板で作られており、特殊なやり鉋削りで作られ艶々していて端麗に感じました。
- 鴨居…長押に直接三本の浅木を打ちつけた初期の鴨居で歴史を感じました。

実は前情報もなく、たまたま訪れ世界遺産の書院を見る事になり、自分でもビックリしながら見学をしたのでした。このように行動することで新しい発見があり感動もする。皆さんも無計画で、ただ思いつくままに旅をしてみてはどうでしょうか。

〈いしづち〉2024/11
令和6年11月発行
発行人　**会長　尾藤淳一**
発行所　**公益社団法人　愛媛県建築士会**
〒790-0002　松山市二番町四丁目1-5　愛媛県建築士会館2F
TEL（089）945-6100　FAX（089）948-0061　http://www.ehime-shikai.com
印刷所　アマノ印刷有限会社
情報・広報委員会・広報委員
委 員 長／大平　将司　　副委員長／渡邉　道彦
編集委員／池川　佳代　　河合　優志　　西岡　亜有美　　西森　勉